

# 観光振興は地方を救うか

——交流から始まる観光とこの国のちから

## 2

首都大学東京 准教授 山下 祐介

前任の弘前大学において、青森県津軽地域の過疎山村の研究を進め、都市と農山漁村、さらには首都圏と津軽の交流を目指して「津軽学」の運動に加わってこられた、首都大学

東京准教授の山下祐介氏に、農山村の魅力、地方と中央、農村と都市との関係性、観光開発の課題、交流観光への期待などについて、「」寄稿いただいた。

### 観光コンテンツづくりは儲からない

平成26年秋に始まった地方創生（まち・ひと・しごと創生）。28年度には地域の「稼ぐ力」を鍛えるべくその本格施行が始まっている。なか

でも期待されているものの一つが観光だ。

だが、観光は地方にとって本当に稼げる普遍的な手段なのだろうか。観光振興は地方を救うものなのか。

たしかに観光客が一人でも増えれば、そのぶん地方に落ちるお金の量が増え、経済は潤う。しかし、例えば次のような具体的なケースを考えたとき、観光振興は地域が率先して取り組むべきものなのかは疑問に思える。

ある地域でお母さんたちのグループが、埋もれた郷土料理に付加価値を付け、絶品のメニューを開発したとしよう。それが地域で評判になり、ローカル放送を経て全国放送で紹介された。それを見て、次の休暇の家

族旅行先に悩んでいた東京のサラリーマンA氏が行き先をそこに決めたとする。

たしかにA氏の家族がそこに旅行し、その料理を味わったことで、家族4人、1食750円として計3000円がその地域に落ちた。お母さんたちはお客さんが来てくれたことを喜び、お客さんも思った以上の料理とおもてなしに感激、「来年もまた来る」と次の販路が開拓されて、人々の交流が始まったとすれば、たしかにここに悪いものは見当たらない。だが、私にはどうも次のことが引つかかる。

このお母さんたちの稼ぎ3000円に対し、A氏一家が東京からこの地に来るまでの交通費、その日の宿

泊代、さらにはその間の、例えば朝新幹線に乗るときに駅で購入した飲み物や弁当代、帰りの駅の土産物屋で購入した土産の品々の代金などを考えると、このお母さんたちの努力がきっかけとなってA氏らはこれらのお金を落としたのにもかかわらず、お母さんたちに入った金額は微々たるものだ。報道したメディアも一見、観光客を善意でつないだように見えるが、それはそれでスポンサーから制作費をもらっている。むしろこのお母さんたちのおかげで番組ができたとさえいえよう。要するに言いたいことはこうだ。

観光開発はたしかに経済を潤す。だがそこで生じた利益の多くは、必ずしもコンテンツを開発した人ではなく、観光の基盤をなす、交通会社や旅行会社、要するに観光インフラ事業者に落ちる仕組みになっている。観光コンテンツづくりは基本的には儲からない、儲かってもそんなに大きな金にはならない。そこで生じた経済のほとんどは外にとられてしまう。ならば地方はこれ以上観光開発はするな、というべきだろうか。

## 商業観光ではなく 交流観光を

そもそも観光とは何か。何のための観光振興なのか。このところの地方創生ではやたらと「稼ぐ」が強調される。だがそもそも観光は「稼ぐ」ためのものなのだろうか。

観光は楽しむものだ。旅行者が楽しみ、また受け入れる側も楽しむことが基本だ。なぜなら観光は、産業である前に交流だからである。

交流は楽しくなければならぬ。楽しんだ結果、経済もまた潤うことになるかもしれないが、基本はあくまで楽しむことにある。そうした観光本来の姿を忘れ、お金を落とす相手としてだけ観光客をとらえはじめたら、そのとたんにその観光は衰退するだろう。誰もそんなところには行きたくないからである。

もちろん周到に実利を企んで観光を企画することは可能だし、そうした成功事例もある。だが地方創生でやるべきは、そうした商業観光ではないはずだ。地方と中央の、農村と都市の交流観光こそを指ささなくて

はならない。いや、それでも観光でその地域に着実にお金が落ちるのならまだ良いのだ。今見たように、お金が欲しくて人を呼んでも、そのお金は地方にはほとんど落ちない。旅行者が投資したお金のほとんどは他所にとられてしまう。

それでもなお観光が大切だとしたら、その楽しみ、喜びが、この国にとつて、あるいは地方や地域にとつて必要だからだ。「訪れてみたい場所がある」——これが都会の人々の生きがいにつながる。逆に「この地域は訪れる価値のある場所だ」が、その地域にとつての誇りになり、活力につながるっていくのだ。そして今の日本にとつて問題なのは、この国が今、楽しい国ではないことにある。私たちが取り戻さなくてはならないのは楽しむことだ。その意味で観光振興は必要だし、進めていかねばならない。

## バランスを損ねれば 観光は力を失う

要するにどうも、今回の地方創生

に始まる稼ぐための観光開発は、こうした観光の本質を見失っているのではないかと感じるのである。

おそらく必要なのはこういうことだ。観光インフラ産業と、観光コンテンツ開発は、観光の両輪である。そして、今回の地方創生が目指す観光が、中央から地方へ、都市から農山漁村へと向かうものだとなれば、一般にインフラは中央が、コンテンツは地方が担うことになる。

問題は、この二つの関係がどうも対等でないことだ。地方が中央に追い立てられてやらされている図式なのである。冒頭に、地方創生で期待されているものの一つが観光だと書いていたが、実態はどうも違う。地方には儲けは少ないのに、中央に煽られ競争させられている感じなので、地方には本当のやる気が出てこない。このことで現場はとてモグクシヤクしているように見える。

交流観光は、中央と地方の、都市と村落のお互いの適切な交流によって成り立つものである。問題は、そのバランスが崩れてしまっていることにある。そうだとしたら、その調

整をしなくてはならない。ならばそのために必要なことは何か。

一つは観光業界全体の経済の調整である。コンテンツづくりにはどうしたって一定の努力が必要だし資金もいる。今や外国人も増え、日本人の目も肥えているから、これまでのものでは人々は満足しなくなっている。豊かなコンテンツが必要だ。そのコンテンツづくりの負担を全て地域の人々や自治体にゆだね、しかもそれを中央では「ちゃんと作れないなら、こちらは手を引きますよ」といわんばかりの歪んだ関係になりつつはないか。中央と地方が対等の関係に戻り、地方の観光文化醸成が着実に成り立つようなお金の巡りをしっかりと確立して、持続可能な観光業界へと体制を改めることが必要だ。今のままでは観光業界は地方を搾取し、あとは抜け殻だけが残ることになる。それでは業界そのものが持続できない。

そして見落とされがちだが大切なことのもう一つは、都市住民の暮らしの問題である。とくに首都圏・大都市圏の中・低所得者層に、もっと

経済活動以外の自由な時間を与えるべきだ。国民に余裕を持って休んでもらわなければ、観光産業は成り立たない。コンテンツづくりも、その消費も、もっと多くの国民の参加が必要だ。外国人を呼ぶ前に、自国民の需要を喚起しなければ、観光地のほとんどがこの先、生き残れまい。

中央と地方、都市と農村、そして経済と暮らし、カネと時間のバランスがあまりにも生産一辺倒に偏ってしまったのが、現在の日本社会が抱える問題の原点である。今必要なのはこれ以上切り詰めるのはやめると、適切な余裕を確保することだ。

観光文化は余裕から生まれる。そして余裕がつくる交流が新しいアイデアや発見を生み、イノベーションを育むのである。今、観光が稼ぐ産業へと転換を求められつつある。だがそうした転換は、この国そのものの衰退につながるだろう。私はこうした転換に危機感を覚える。その抵抗が、私にとってはこの10年来の津軽学や白神学の運動だった。本稿ではその紹介を試みたいと筆をとったのだが、その論理ばかり書いて

紙面に全く余裕がなくなってしまった。それでも少しばかりふれてみることにしたい。

## 津軽学・白神学の試み

私は前任の弘前大学着任以来、社会学の立場から、青森県津軽地域の過疎山村の研究を進め、そこから津軽の農村、漁村、そして都市をめぐる近代化のダイナミズムを解きほぐす分析を行ってきた（『津軽、近代化のダイナミズム』御茶の水書房）。こうした研究の成果をふまえて、都市と農山漁村、さらには首都圏と津軽の交流を目指して津軽学の運動（『津軽学』津軽に学ぶ会、第10号まで、以後続刊）に加わってきたのは、次のようなことに思い至ったからである。

例えば山村について。都会の人々は、山間部に展開する村落を、平地の人々が追い詰められて奥地に入り、定着したものと思いついでいる。山村民は貧しく、愚かだとさえ感じているようだ。それが今回の地方創生が変な方向に向かう下地にもなっ



『白神学』『津軽学』表紙

ている。

ところが実は、どんな山間部にも古くからの私たちの祖先の足跡はあり、山村は生きるのに便利で豊かなところであった。山と川、海の接点にしばしば古い遺跡は点在してい

る。平野部に広がる水田や都市などは、ずっとあとになって始まったものにすぎない。

そしてこうした古い村には様々な生活文化が蓄積されており、そこに根付く心性には日本人の暮らしのあり方の原点が潜んでいる。私がとくに親しんだ津軽の山村には、黒石市山形地区の大川原（火流しで有名）、弘前市相馬地区の沢田（ろうそく祭りで有名）、鱒ヶ沢町赤石地区の深谷（住民参加型バスで有名）などがあるが、こうした地域に行ってみてくる津軽の風景——岩木山と岩木川、八甲田山、梵珠山、津軽平野と津軽半島——は、日本人の暮らしとは何かを根本から考え直させるものだ。

そして私はなかでも白神山地について「白神学」を立ち上げて、その内容を深めてきた（『白神学』ブナの里白神公社、現在全3巻）。ともすると世界自然遺産として、「自然」の側面だけに焦点があてられる白神山地だが、岩木川を通じて城下町・弘前との深い関わりがあり、山の木、鉱物、そして採集物や獲物たちは、



白神学ツアー

弘前藩にとってなくてはならないものだった。そしてそうした山の民にアクセスして繰り広げられた菅江真澄、平尾魯仙、森山泰太郎ら国学・民俗学者による白神のフィールドワークは、山村と都市、そしてこの国の成り立ちさえ深く考えさせるものである。私はこの先達の成果を活用して、さらに歴史学や地理学などの知見も取り込みながら、白神の観光コンテンツの更新につとめてきた。

そして、ただモノを書くだけでなく、白神学ツアーを実際に企画し、また東京でも東京白神塾を開催してみたのである。やってみると人々

の反応は非常に強く、こうしたコンテンツを用いた観光には多くの期待が潜在していることが分かった。本当のこと、本物について知りたがっている人が、いかに多いことか。

私はこれをもっと続けたいと思ったのだが、もう一つよく分かったことは、こうした真面目なツアーは人員を切り詰める必要があり、持ち出しが多く、負担も大きいので素人が続けるのは無理だということだった。その後はごく身内の人と細々と続けているが、やはり残念に思うのは次のことである。

私自身が都会生まれの都会育ち。17年の弘前での暮らしを経て、首都圏の暮らしを今あらためて体験して思うのは、都会の人々——とくに若い人や子どもたち——はもともと地方へ、農山漁村へ、そして山や海へ行かなくては駄目だということだ。それもただリフレッシュするということではなく、自分がどうやって生きているのかを、観光を通じてもっと間近に理解する必要があるということである。

私たちはこの列島の山川海の自然

で暮らしを成り立たせており、しかも何千年もの文化と歴史の蓄積があつてそれが可能なのであつた。会社で雇われ、給料をもらつて暮らしただけのように見えるが、実際は山があり、森があつて、水が流れ、大地を潤し、そこに農が育まれ、漁が挑まれ、採集や収穫を行つているという基礎があつて、はじめて村ができ、町ができ、都市が生まれて、国家も経済も成り立っているのである。地方には、そうしたものが十分に身近に感じられるフィールドがたくさんあるが、大都市に暮らししているとそれが全く見えない。そのことが偏狭な認識を生んで、この国の政策をおかしなものにしている。そしてそもそもこの国の経済成長がストップし、人口減少が止まらなくなっているのも、そうした認識の狭隘さが原因なのだ。

観光——とくに交流観光——は、こうした隘路からこの国が抜け出るためにどうしても必要なものである。私たちはもつと知らない地域について学び、楽しみ、互いに理解し合わなければならない。そして交流

し、楽しむ中から、この国のさらなる成長の芽も生まれてくるはずだ。そうした本当の観光はどうしたら可能なのか。私ももう少し抵抗を続けてみたいと思つている。

(やました ゆうすけ)

註 ここで行った議論については、拙著『地方消滅の罫(ちくま新書、2014年)』なども参照されたい。



山下祐介(やました ゆうすけ)

首都大学東京准教授(都市社会学・地域社会学・農村社会学・環境社会学)。1969年生まれ。九州大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程中退。九州大学助手、弘前大学准教授などを経て、2011年より現職。『津軽学』(津軽に学ぶ会)の運動にも参加。著書は『人間なき復興 原発避難と国民の「不理解」をめぐる』(共著、ちくま文庫、2016)、『地方創生の正体 なぜ地域政策は失敗するのか』(共著、ちくま新書、2015)、『地方消滅の罫「増田レポート」と人口減少社会の正体』(ちくま新書、2014)、『東北発の震災論 周辺から広域システムを考える』(ちくま新書、2013)、『限界集落の真実—過疎の村は消えるか?』(ちくま新書、2012)、『白神学』(第1巻～第3巻、共著、ブナの里白神公社、2011～2013)、『リスク・コミュニティ論』(弘文堂、2008)など多数。